

教科	算数科
第5学年『平均とその利用』授業実践・授業研修	
日時	令和8年6月5日 3校時
授業者	辰崎 圭
本時のねらい	複数の外れ値から採点データを比較する活動を通し、目的に応じて、平均の異なる求め方を見出し、多面的に結論を考察する。
キーワード	データの考察、複雑な課題、統計的問題解決、平均、多面的な考察、外れ値、本質に迫る対話
授業の実際 (本時の子供の姿)	子供たちは「スポーツの採点でどの選手が勝ったといえるか」という問いに対し、これまでの学習をもとに「合計」や「平均」を用いて意見を出し合った。採点データを見出し、児童の要求に応じて少しずつ提示していくと、「A国選手は上手いのにX国審査員が0点をつけている」「X国は自国の選手に満点をつけている」とデータのズレに気づき始めた。「嫌がらせではないか」「不公平だ」と自然に問いが生まれ、通常の平均の限界と外れ値の存在に気づいていった。さらに「Y国も外れ値ではないか」「全員条件を同じにして一番高い点と低い点を外せば公平になる」と、自他の考えを更新して新たなルール(トリム平均・刈り上げ平均)を創発した。学習の最後には、「自分たちが考えた方法がオリンピックでも使われていると知って驚いた」といった声があがり、子供たちは予想とデータを結びつけながら、多面的に考え、協働して課題に向かっていた。
事後協議の概要	事後協議から以下の3つが協議の柱となった。1点目、授業において、意図的に情報を示さず「欠け」を作ること、児童の素朴概念との間に認知的葛藤を生み、対話を通じて平均の本質に迫ることの重要性を確認できた。2点目は、授業において、外れ値という不確実性を伴う複雑な課題を設定することで、子どもたちが主体的・対話的に学ぶ環境を作り出していた。そのことが、平均を通して、多面的に考察する力を育てていた。3点目は、授業では、子どもたちが、複雑な課題に対し、データを根拠として統計的問題解決を行うと同時に、粘り強さや複眼的に問題に取り組むレジリエンスを育成することができた。本学校園で目指す資質・能力は、教科の本質に迫ることを通して育まれると考える。

※写真を数枚(授業の様子が分かるもの・協議の様子等)

